

ある平日、普段より一層暑い日の下を歩き家に帰ると何やら体が重く、体の節々に痛みを感じた。疲れが出たのかとハウスメイトに湿布を貰いに行った所で「それは風邪じゃないか」と指摘され、漸く風邪だと気付いた。

すわ Deng 熱かと思いきや翌早朝から大学の医療機関に駆け込み血液検査を受けたところタダの風邪だと診断された。一安心である。ただ2~3日経っても熱が引かず、なお上がるようなら Deng 熱の疑いありという事でまた来るようにと念を押された。(ビザの遅延、到着直後の引越しでバタバタしており、義務であったメディカルチェックをすっかり忘れていたためスタッフ始め多くの方に迷惑をかけてしまった。特別事例として先に診てもらえたが、この教訓を忘れずにいたい。)

という事で風邪を引いた私はこの数日部屋で寝ていた訳だが、こちらの看護方法は日本とだいぶ違った。

例えば病人食。部屋で寝ていると知った大家さんをご厚意で用意して下さった食事をハウスメイトが持って来てくれた。日本ではお粥と梅干だが、こちらでは大麦と冬瓜を煮込んだ重湯のようなものだ。甘く、胃に優しい。個人的にはお粥よりも好きだ。飲み物はココナッツジュース。これも熱を下げるのに良いらしい。

また別の日、今度は別のハウスメイトが小さな瓶と木製のナイフを持ってきた。言われるまま服を脱ぎうつ伏せになると、彼は瓶に入っていた軟膏を背中に満遍なく塗りこみ、木製のナイフでゴリゴリと這うように搔き始めた。思うほど痛くはなく、そのまま15分ほど雑談していると、心なし体のダルさが取れたように感じた。これは guasha (刮痧・グアシャ) というらしい。中国マッサージの一種で、体内の毒素を排出してくれるのだとか。終わった後自分の背中を鏡で見ると一面真っ赤になっており驚いたが、これが普通なのだという。

その後大家さんの食事とハウスメイトの看病のお陰で直ぐに熱は引き、未だ頭痛は残るものの何とか動けるようになった。所変われば品変わるの言葉通り、苦しくも非常に興味深く、この家に引っ越して良かったと心から感じた数日間だった。

小倉

(蛇足 マレーシアの民間療法で検索してみるとマレーシア人は風邪を引いたらアッサム・ボイ(マレーシアの干し梅)とゴキブリをコップに入れお湯で取った出汁を飲むという記事があり、驚いてハウスメイトに確認したが彼女もそんな話は聞いたことがないと驚いていた。少なくともこの家では一般的では無いらしい。)



写真左は軟膏とウッドナイフ。写真右はマッサージ後1時間経った背中。薄らと赤みが残っている。